

幼 児 の 教 育

昭 和 八 年 十 二 月

冬

ひる前の陽光を一ばいに受けた南椽。霜ぎけの庭には葉がくれの山茶花が咲いて、
きこかで蛇がないてゐる。黒ずんだ障子の腰板に立てかけた小袖屏風の中に、人形が
寝かせてあつて、そこらに千代紙の切屑が散らばつてゐる。何か口ずさみながら隣の
友達とあやまりをしてゐる女の子。

薪火のあか／＼と燃え上る爐。芋のこける嗅ひ。窓の外には午後のおす日の影がさ
して、時を置いては雪解けのあまたれの音が聞える。針箱の横に足を投げ出したまゝ、
芋をたべながら兄弟で母の話を聴いてゐる男の子。

冬は家庭の子ぎもに、なごやかな暖さを恵む。幼稚園にもそんな味が是非ほしいも
のである。